

Mon	Tue	Wed	Thu	Fri
	11:00 Abnormal Psy. 12:30		11:00 Abnormal Psy. 12:30	
1:00 Child Psy. 2:00	1:00 WORK	1:00 Child Psy. 2:00		1:00 Child Psy. 2:00
	3:00	2:00 WORK		2:00 WORK
		4:00	3:00 WORK 5:00	
5:00 Human Behavior I 8:00				6:00

1. Development I: Child Psychology (3 credits)

人間の心理発達を乳幼児期、思春期、青年期以降の3段階に分けた授業のうち、初段階である。ここでは、受精卵から胎児への成長、出産、乳児から幼児への成長という流れに沿って、子どもの心理、認知、言語、運動機能、身体それぞれの発達を学んだ。基本的にはクラスの初めに抜き打ち小テストが行われたあと、教授による講演という形で授業が進められた。パワーポイントを使ってポイント的にわかりやすく説明してくれたので、授業中に十分理解することができた。オペラント条件付けや育児の4タイプなどカテゴリー化が難しい知識では、グループごとに例を考えて劇をして見せたあと他グループに当ててもらおうというゲームを通して具体的に考えることができた。

定期テストはテキストを3章終えるごとに行われた。レポートは序論、方法、結果、考察に分けて書き、フィードバックを受けながら最終的に1つの研究報告書として提出するというものであった。私は、障害児教育に力を入れていたヴィゴツキー心理学者が考えた発達の最近接領域 (Zone of Proximal Development) を用いて、聞こえる子どもとろうの母親における読書活動と日常的な活動 (着替え、入浴、片づけなど) について調べた。子どもが自分でできること (Lower limit)、支援付きでできること (Upper limit) を定義し、母親の言語的介入がどう変わるか (Verbal Scaffolding) を分析した。この課題は研究レポートの書き方の練習にもなった。

2. Abnormal Psychology (3 credits)

精神保健の診断基準書「DSM-IV-TR」に登録されている精神障害について学んだ。まずは、原因を精神力学 (Psychodynamic)、生理学 (Biological)、行動学 (Behavioral)、認知学 (Cognitive)、社会文化学 (Sociocultural) の5視点から分析する方法を学んだ。次に症状を感情 (Affective)、認知 (Cognitive)、行動 (Behavioral)、身体 (Physiological) に振り分け、精神障害ごとに特徴的な症状を定めていった。気分障害 (Mood disorders) から不安障害 (Anxiety Disorders)、心身症 (Somatoform disorders)、解離性障害 (Dissociative disorders)、統合失調症 (Schizophrenia disorders)、摂食障害 (Eating disorders)、人格障害 (Personality disorders) へと深刻な障害になっていくうちに、症状が他とかぶって区別が難しくなってきた。このとき、原因と症状を分類化して客観的にまとめる方法がとても役立った。また、何が普通で何が異常かの判断は文化の違いにも左右されやすく実に主観的で、診断対象が子どもとなると発達の個人差が加わってさらに難しくなることもこの授業で強く実感した。

課題については、テキストに応用した問題集と事例分析 (障害の特定、症状の4分類化 & 事例との照合、一般的な治療法のまとめ & 事例に用いられた治療法の特定、感想) が毎回課された。学期末レポートでは、精神障害者が登場する映画を1つ見て、その事例がもつ障害について説明しながら事例分析を行うというものであった。私は統合失調症のある天才的な数学者ジョン・ナッシュ (John Nash) の半生を描いた「A Beautiful Mind」を選んだ。統合失調症の定義、下位タイプ、病因、症状、予後 (Prognosis)、治療法をナッシュの事例と照らし合わせ、まとめた。専門知識が多く複雑な分野だったが、大学院では基礎となる専門用語を身につけることができた。

3. Human Behavior and the Social Environment I (3 credits)

学士レベルの心理系クラスに対して、こちらは修士レベルのソーシャルワーク系クラスである。この授業では個人の問題を、本人を取り巻く社会システムとつなげて分析する。分析の練習は1つの事例に1つの思想の応用から始まり、中間レポートで自分が関心ある社会問題に複数の思想を応用し、最後に期末レポートでは課題本に登場する3世代家族を対象に複数の思想を当てはめた。個人が抱える問題を分析するための「Tools」として思想を使えるようになることと、分析結果をまとめ上げることがこの授業のねらいであった。複雑で大掛かりな作業だったが、効果的な支援や治療を断定するにあたって役立つスキルを磨くことができた。

また、文化とスピリチュアリティについても深く学ぶことができた。この2つは個人と社会のあり方に違いを生む要因として、大きな影響力をもつと考えられている。多文化をテーマにしたパネルディスカッションで、文化的・生育的背景だけでなく、ろう・難聴に関する経験や自己概念にも多様性を含んだゲストたちが招かれ、個人と社会の大きな結びつきを強く感じた。スピリチュアリティについては、それを専門とする外部学者による講演があった。個人の信念は、必ずしも宗教によるものではなく、個人の経験から形成されることや、信念が肯定的であるか否定的であるかによって脳内の働きが変わり、心身の反応に個人差を生むという。こうした科学的な精神の見方は、心理カウンセリングを進めるにあたって1つのアプローチ法として役立つと思う。

次学期の目標

- ・ ASL 検定で5点満点中3点以上取る。
- ・ アメリカの心理カウンセリングのシステムと現状に関する基礎知識を学ぶ。
- ・ アメリカの教育システム、法律に関する基礎知識を得る。
- ・ 心理分野の研究方法について知識と技術を高める。